

法華經方便品再考

— 偈頌解釈における問題点 —

田 中 典 彦

方便品第七十六偈以下九十七偈にいたる、いわゆる小善成仏を説くといわれているところは散文には全く説かれていないところであり、その意味においても多くの問題を含んでいるといえよう。今は現存する梵本を中心に諸訳を比較検討しながら、特に重要であると思われる *abhāsi* の語に注目してその解釈について考察することとする。そこで七十六偈を代表的に取り上げて示すと、

virāḥ ca dhyaṇa ca kṛtadhikarāḥ prajñāya vā cintita eti dhar-
māḥ/vivīdhāni puṇyāniyeṇi te sarvā bodhīya abhāsi labhinah//
である。

abhāsi はその形からすれば *√bhū* のアオリストと考えられ、しかも偈全体からしてみると *te* にかかわるものと解されるから *3rd* と考えられる。ところが Root-aorist に属する *√bhū* のアオリスト *3. pl* の形は classical 文法によるならば *abhyāvan* であり、他の人称、他の数においても語尾 *-si* の形をとるものはない。そこで次に語尾変化のみに注目してみるならば、*1st* またはそれに近い形をとるのは S-aorist における (active) *2. sg. -sis*, (active) *3. sg. -sit*, (middle) *1. sg. -si* であり、*1st* では第三類アオリストと呼ばれる動詞の *1. sg. 2. sg. 3. sg.* ということになる。ところが

文章から *3rd* で示されるところが三人称であることは明確であると考えられるから、以上の中 *2. sg.* のものだけが認められることとなる。しかしそのように考えるならばまた新たな問題に直面する。つまり *3rd* が複数の形であるに対して *2. sg.* の動詞でそれを受けることが可能かどうかの問題である。この場合 *3rd* を集合名詞的なものと考えなければならぬこととなる。しかしこのように考えることの難点は七十八、七十九、八十偈等に見られるように *ye te* の構文中 *ye* に導かれる文中の動詞が明らかに *3rd* の形をとっていることから知り得る。したがってここでは文章における文法的一致という点を考慮して *abhāsi* もまた *3rd* であると考えるを得ないであろう。語尾 *-si* に関しては問題が残るが *3rd* の形が単数として用いられることが多々あることからその逆として *2. sg. -sit* が複数を示すに用いられ得ることが予想せられ、*3rd* の形から *1st* の形へは偈頌においては韻の関係等から多くなされる用法である。Edgerton *25* (Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar) p. 159 において *√bhū* のアオリストとして *abhāsi* の形が法華經等の偈頌において全く一般的に用いられている形であるとし、それが *1. sg.* および *3rd* として考えられることを述べている。このことは多くの使用例を吟味し、文全体の構成や意味等を考えた上での結論である。いずれにしても以上のような点から *abhāsi* が *√bhū* の aorist *3. pl* の特殊な形であることが認められる。

そこで次にこの理解のもとに、法華經のこの部分との関係からその意味を考えねばならない。アオリストは不定過去の意であり、第三過去といわれる如く時制的には過去である。ところが一般的に方便品のこの箇所を解釈として、小善成仏を説くのであって、これら

の善行によつて仏と成る、あるいは仏と成るであろうことを示す、と現在あるいは未来的な意味としてこの語を解釈しているようである。そこで諸訳を取り上げながらこの箇所を考察する。妙法蓮華経は「皆已成仏道」とし、正法華経は「斯等皆当成得仏道」とする。またケルンの英訳では“have all of them reached enlightenment”とされ、チベット訳は *de dag thams cad byan chub thob par byur* となっている。この中、妙法華と英訳は *abhiṣi* を第三過去 3. pl と解しているようであつて、「仏道を成じた」としている。このことはおそらく *abhiṣi* がアオリストの形をとっていること、散文の部分との相応を考えたからであらうと解することができる。つまり、散文は如来出現の動機や目的を述べる箇所において過去の如来、未来の如来、現在の如来の順に従つて全く同内容のことを繰り返して述べ、しかもそれらを説明して偈に説くとして同順に同内容を記しているが、今問題としている箇所が正にこの過去の如来の所に入つていてと考えられるからである。しかしそのように考えるには過去、未来、現在に同内容が繰り返されながら、小善成仏といわれることに關しては過去の所にだけしか述べられていないことの意味が考慮されねばならないであらう。

次に正法華の解釈について考えると *abhiṣi* の訳として「当成得せん」あるいは「当に成得すべし」を与えている。これは可能法的な意味として解している。しかし可能法としても可能法アオリストとして解するにも困難なようである。また可能法と未来形がほとんど同義的に用いられることが多いことも考えられるが *s-ature* の形において *abha-* までは求められるのみでやはり困難が多いといえる。

チベット訳では *abhiṣi* に対して未来を示す助動詞 *byur* を *thob par* (得る) という動詞に加えた形でもつて訳している。梵本を忠実に訳すためにチベット語には多くの助動詞が用いられていると考えられていることからこの場合も *byur* が *abhiṣi* の意味を正確に伝えるために使われたものと考えられる。言語的な相違があるとしても梵文では *abhiṣi* *labhinah* であつて「得者となる」が原形であり、*abhiṣi* には *abhiṣi* も動詞としての「成る」の意味がある。それに対してチベット語では「得る」という動詞に助動詞 *byur* が加えられたものである。したがつて *byur* は *abhiṣi* というアオリストの形を考慮してのものと受けとれるであらう。このことからすればチベット訳は *abhiṣi* を未来を示すものとして解したことになるが、そこにも問題がある。つまり過去、未来、現在の順に述べる中で、何故に過去の如来云々の箇所になが述べられるかが理解できなくなる。そしてまた、*abhiṣi* がかりに未来の意味を有するとしても助動詞とは異つてアオリストの形が用いられたことの意味が考えられねばならない。

以上の簡単な考察からではあるが結論として、*abhiṣi* は *abhi* のアオリスト 3. pl であり、過去の意味として訳するのが適當であると考ええる。しかし思想的內容としては過去、未来、現在を含んだものと解釈し得る。すなわち、過去の意味において「悟り」に対する証を、未来的意味としてその約束を、現在の意味においては強い如来の誓願を示しているのである。もちろん全体としては如来の誓願におさまるものであらう。このことは結果的には *abhiṣi* を過去として考え、未来、現在の箇所に小善成仏の記述が略されたものと解釈するのとはほとんど等しいものとなる。

(註略)